

□ 次の文を読み、後の問いに答えなさい。

1 人との付き合いというのはなかなか気をを使うもので、趣味とか食べ物の好き嫌いとか、むりやり合わせたり、キョウミのないことでも関心があるように装ったり、苦勞することもありますね。

たとえば、プロ野球のひいきの球団。相手に合わせようとして、思わぬテンカイになることも。「私は子どものころからの巨人ファンでね、つい熱くなっちゃうんだよ。きみはこのファン？」

「も、もちろん、ジャイアンツファンですよ。野球は巨人、決まっているじゃないですか」

「そうか、そうか。そりゃ、気が合うね。巨人ファン同士となると、シヨウダンもスムーズに進みそうだね。ところで、昨日の巨人―阪神戦、見た？ 惜しかったねえ。いい試合だったんだけど、エンチヨウ戦の末、引き分けだもんね」

「まったく、もう少しのところで……残念でしたね」

「ほらほら、九回裏の巨人の攻撃、ツアアウト満塁で、すごい当たりだったのになあ。ファウルになっちゃって」

「そうそう、あれ、あわやホームランかと思いました」

「うんうん、そうそう、あわやね、えつ、あわやホームランだつて？ きみー、ホントは巨人ファンじゃないな！」

*

2 「あわや」は、目の前に迫った危険をす前で回避したときに思わず発する言葉に由来します。「あわやぶつかりそうになった」「あわや大惨事」となる「あわや」など、好ましくないこと、そうなって欲しくないことが起こりかけたときに使われる「あわや」です。(1)、「あわやホームラン」は、ホームランを好ましくないことと捉えた言い方になります。「ホームランになるところだったけど、ならなくてほっとした(巨人に点が入らなくてよかった)」という気持ちが、はしなくも出てしまったというわけです。(2)、本当に巨人ファンだとしても、「あわや」を使った以上、アンチ巨人かと誤解されても仕方がないともいえます。

「あわや」は、「もう少しのところだ」といった中立的、客観的な意味を表すだけでなく、「そうなって欲しくない」という発話者(書き手)

の気持ちが進められている言葉なのです。『明鏡国語辞典第二版』にも「幸運や成功についていうのは誤り」とあり、「あわや記録達成」というところで失敗する」の誤用例が載っています。

(3)、誰かの幸運・成功が、ほかの誰かを悔しがらせたり、落ち込ませたりすることは世の習い。逆に、他人の不運・失敗に得たりとほくそ笑む輩もいるのもご承知の通り。「あわや」が適切かどうかは、人により、立場により、変わってきます。(4)、発した者の隠れた思い、立ち位置をあらわにしたり、いらぬ誤解を与えてしまったりすることもあるでしょう。

*

3 文化審議会国語分科会は二〇一八年三月、「分かり合うための言語コミュニケーション(報告)」をまとめました。そこでは、言語コミュニケーションで考慮すべき要素の一つに「ふさわしさ」を挙げています。言語コミュニケーションの障害となるのは、意味の取り違えや、語形の誤り、文法的な規範の逸脱ばかりではありません。「そうなって欲しかった」ことが実現せず、がっかりしている相手に対して、「あわや……だったね」と声をかけるのは、ふさわしいとは言えません。

報告では、「台風の当たり年」を例に挙げています。(5)、作物がたくさんとれる年を指す「当たり年」を、農業にも大きな影響を及ぼす台風の数の多さに用いるのは、比喩表現として適切かどうか。迷惑を被った人たち、被害に苦しむ人たちの心情を傷つけるおそれもあります。

*

4 ふさわしさを考慮して伝え合うためには、「語彙の引き出し」をいっばいにし、きちんと整理しておかねばなりません。新学習指導要領でも、小学校から高等学校まですべてにわたって、「語彙を豊かにすること」と締めくくられる項目が入りました。たとえば、高等学校(「現代の国語」)では、「話や文章の中で使うことを通して、語彙を磨き語彙を豊かにすること」とあります。やみくもに語彙の量を増やすのではなく、文章の目的や対象に合った語彙を選択できる力、表面的な意味だけでなく、与える印象や細かな用法の違いを意識して使えるセンス、といったことが求められているのではないのでしょうか。

「あわや」や「当たり年」のように、ある価値観や、プラスもしくはマイナスの方向性が潜んでいる言葉の存在に気づき、類語を探したり、別の表現ができないか工夫したりすることは、語彙を豊かにするきっかけになるはずだ。

「もう少しでホームランだった」は、攻守どちらからも使えます。守る側とそれを応援する観客のほっとした気持ちを表すのが「あわやホームランだった」です。「危うく」「危なく」にすると、もつとへ A へ が伝わるでしょうか。同じ状況を、攻める側のへ B へ を代弁するなら、「もう一息で、ホームランだった」「惜しくもホームランにならなかった」となります。

*

5 「まいったな、筋金入りの阪神ファンとしては、巨人びいきのふりをするのは至難の業。あの部長もしつこいのなんの。やっと、解放されたよ」

「やっと、で悪かったね」

「ギョッ、今の独り言、聞いてたんですか」

長い時間をかけて実現することについて用いる副詞が「やっと」です。それが実現することを期待する思いが含まれています。

では、「大災害の全貌が明らかになり、最悪の事態がやっと判明した」は、どうでしょうか。全貌判明は期待されていたとはいえ、それが最悪の結果だったとしたら……。『ふさわしさ』の視点から考えてみてください。

(関根健一の文による)

問一 部 a ~ f の漢字をひらがなに、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 () 1~5 に入る語を、次から選んで記号で答えなさい。
ア つまり イ あるいは ウ ときには エ ただし オ 本来

問三 ……部 A 「はしなくも」 B 「世の習い」 C 「ほくそ笑む」の意味を、それぞれの選択肢から選び記号で答えなさい。

A はしなくも
ア わきまえずに
イ 思いがけず
ウ ひかえめに
エ わずかながら
オ おさえることもできず

B 世の習い
ア 普通に行われていること
イ 世間に見習うべきこと
ウ 習慣として世間が認めていること
エ 先例があること
オ 世の中ののろわしいこと

C ほくそ笑む
ア 大きく笑うこと
イ 心の中で大笑いすること
ウ にっこりとして同意すること
エ ひそかに笑うこと
オ 意地悪な笑いをかくすこと

問四 「」には、「あわや」の品詞名を漢字で入れなさい。

問五 段落3の本文には次の一文が抜けている。この一文が入るところの直前の五字を抜き出しなさい。(句読点を含む)

文法的に正しくても、ある価値判断を含む言葉をそれと意識せず用いるのは、「ふさわしさ」に欠けます。

問六 〰部①～⑥の語彙のうち一つだけ「語感」と改めなければならないものがある。記号で答えなさい。

問七 〰部①「攻守どちらからも」というのは、何を伝えようとした表現なのか。本文から十字程度で抜き出して答えなさい。

問八 〰A 〰B 〰に入る言葉の組み合わせとして正しいものを次から選び記号で答えなさい。

- | | | |
|---|-------|---------|
| ア | A 緊張感 | B 切ない思い |
| イ | A 緊張感 | B おもしろさ |
| ウ | A 危機感 | B おもしろさ |
| エ | A 危機感 | B 切ない思い |
| オ | A 安心感 | B 悔しさ |
| カ | A 安心感 | B 楽しさ |

問九 〰部②は、この文の「やっと」の使い方について「ふさわしさ」から考えると問題点を含んでいるという。次の説明文から、最もふさわしいものを選びなさい。

- ア 「やっと」には、労力をかけたという意も添えられるので、頑張って調べたことを不快に感じる人もいるかもしれないという意。
- イ 「やっと」には、時間がかかったことを振り返り述べる意が添えられているが、作業を急ぐ気持ちが前面に出ていると受け取られかねないという意。
- ウ 「やっと」には、仕事や作業に時間的な支障があったことを思わせる言葉であるから、とりまとめを急ぐ力がかかっていたと思わせってしまうという意。
- エ 「やっと」には、やり終えて安堵する気持ちを含ませてしまうが、被災者の気持ちを逆なですることになりかねないという意。
- オ 「やっと」には、事態を深刻に受け取る姿勢よりも、それを解明する側の労力や時間に意識が注がれていることに思いやりのなさを示しているという意。

③ 次の文を読み、後の問いに答えなさい。

奥山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿の声きくときぞ秋はかなしき　よみ人しらず（秋上）

この歌は、『小倉百人一首』には猿丸大夫の名で採られているので、知っている人も多いはずである。

この歌を読むと、花札かるたの、楓紅葉と鹿の図をつい思い浮かべてしまう。秋の「A」を織りなす紅葉と鹿の声、どこか華やかでしかも寂しさのある情景だが、実のところ、この歌の「もみぢ」は本来は「萩の黄葉」である。のちに『小倉百人一首』を撰んだ藤原定家は、『新古今集』の撰者でもあるが、定家の時代にはもう、この「もみぢ」は「楓の紅葉」として受けとられていたようだ。しかし、『古今集』の配列からみると、これはずっと萩の歌がつづいているなかにあり、どうみても「萩」である。

鹿の鳴く声が、なぜしきりにとり上げられるかといえば、それは妻を恋う鳴き声だからである。妻問う鹿の声は、上代の人々の情感をそそのものだった。『万葉集』には、巻十に「B」を詠む」という題で十六首がおさめられており、そのほかにも、いくつも鹿の声が登場する。

わが岡に小牡鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴く小牡鹿　大伴旅人（万葉集・巻八）

秋萩の散りの乱ひに呼び立てて鳴くなる鹿の声のはるけさ　湯原王（同）

現代でも、奈良といえは鹿、と思ひ浮かべるほど、「C」地方には古来、鹿が棲んでいた。明日香の時代、奈良の時代は、都にあっても鹿の声は身近であった。秋萩もまた、人々にたいそう愛された。

ある秋、私は時雨の降る夕暮れに奈良郊外の秋篠寺を訪れたことがあった。小さな山門をくぐると、石畳の両側から、あふれるようにして、萩のくさむらが黄色く黄葉していた。萩の黄葉は見知ってはいたが、これほどにみごとに、ゆたかに、輝くばかりの黄葉の群れを見たのは初めてであった。私はしばらく、足を運ぶのも忘れて、時雨のなかに立ち、萩の黄葉に見とれていた。

その経験があるために、私には「萩と鹿」のとり合わせが、実にいきいきと感ぜられる。^②どんなに美しく整った歌でも、そこに「生きた実感」がなければ、歌は本質的に成り立たない。それは王朝和歌においても同じことである。歌はひとつの核のようなもので、受け手のほうもまた、その実感を共有し、共鳴する。鑑賞者のほうに実感があれば、歌という核は何十倍にもひろく、深く、共感できる面がある。

ところで、都が大和、奈良を経て大きな平安京に移ってからは、鹿の鳴く声も耳にしなくなったのか、『古今集』^③では、山里の風情に思いを馳せての歌が多い。

秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今や鳴くらん　藤原敏行（秋上）

「高砂の尾上」とは、王朝和歌に多い表現であるが、元来は「高砂」は、砂の高く丘のようになったところ、つまり「山」を意味し、「尾上」は「峰の上」で、山の頂という意である。しかし、高砂を、今の兵庫県加古川の河口あたりの固有名詞とする見方もある。

この歌も、前の「奥山に」の歌も、同じ「是貞親王家歌合」での歌である。ただ、「奥山に」のほうは、「よみ人しらず」になっている。しかし、歌合せに歌を提出するくらいの人々が、名も知らぬ「よみ人しらず」のはずがない、という説がある。是貞親王は、光孝天皇の第二皇子で、このときは秋の歌ばかり勅勘を受けて表面に出られなかった人なのではないか、という説がある。是貞親王は、光孝天皇の第二皇子で、このときは秋の歌ばかりの歌合せが催されたらしい。この「奥山に」の歌は、古歌集の『猿丸大夫集』にみえており、のちの藤原公任の『三十六人撰』には猿丸大夫として入っている。しかし、実在した人かどうかは疑問で、「人丸」（柿本人麻呂）とのかかわりを考える人もある。

おそらくは、古歌を集めた古歌集のなかに入っていたものが、歌合せに提出されたのではなからうか。必ずしもその歌合せに同席した

とは考えなくてもよいのではないか。そう思っただけで読むと、この歌にはどこか古代の面影がのこっていて、『古今集』の「今」よりも「古」に属する歌風のようにみえる。やはり「よみ人しらず」の歌は、少し時代をさかのぼったころの歌が、人々の口誦くわうじゆうとして伝えられてきたもの、と考えるのが素直なのではないかと思う。

(尾崎左永子氏の文による)

注 歌合せ 左右にわかれて和歌の良し悪しを競うもの。

勅勘 天皇の怒りをかうこと。

藤原公任 平安中期の歌人。『和漢朗詠集』を編纂したほか、『三十六人撰』などの秀歌選を編んでいる。

問一 〓部の『新古今集』『古今集』『万葉集』それぞれの作品成立の時代とその時代の他の作品を後から選び記号で答えなさい。

- ① 奈良時代 ② 平安時代 ③ 鎌倉時代 ④ 室町時代 ⑤ 江戸時代
- ア 古事記 イ 土佐日記 ウ 徒然草 エ 奥の細道 オ 曾根崎心中

問二 [A][B][C]のそれぞれに入る語を選び、記号で答えなさい。

- [A] ア 紅葉 イ 鹿 ウ 錦 エ 山奥 オ 味覚
- [B] ア 秋 イ 動物 ウ 鳴声 エ 鹿鳴 オ 獣
- [C] ア 山城 イ 摂津 ウ 河内 エ 和泉 オ 大和

問三 「黄葉」に「もみじ」とふりがながつけられているが、これは古語「もみぢ」の意味として正しい。次から古語「もみぢ」の説明として正しいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 秋に草木が、赤く色づくことではなく、黄色に変色するさまを言った。
- イ 秋に草木が、黄色から赤く変化していくさまを言った。
- ウ 秋に草木が、赤や黄に色づくことを言った。
- エ 秋に草木が、枯れていくさまを言った。
- オ 秋に草木が、落ち葉になっていくさまを言った。

問四 〓部①で述べていることを言い換えた。説明としてまちがっているものを選び、記号で答えなさい。

- ア 古今和歌集の撰者たちの解釈は楓の紅葉ではない。
- イ 古今和歌集のならばでは、この和歌は萩の和歌の中にある。
- ウ 和歌「奥山に」に詠まれた色合いに赤を入れ込んだのは後の時代になってからだ。
- エ 古今和歌集の撰者の解釈と藤原定家の解釈には違いがあった。
- オ 花札かるたの図柄がもとで解釈が狂ってきた。

問五 〓部②では、和歌「奥山に」の良さを再発見している。「生きた実感」の説明として、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 京都での都人の生活ではすっかり自然に生きる動物の様子が感じられず作歌も空想的になった。
- イ 楓の紅葉に鹿が鳴いている図柄が念頭にあったが、それは鹿をよく知らないでいたからだ。
- ウ 紅葉が燃えるような赤さを際立たせるのは秋が来ても色変わりしない鹿の毛色によるものだ。
- エ 萩の小さな葉が色づいているところに鹿の毛色などがとても似つかわしく感じられることだ。

問六 ――部③の「山里の風情に思いを馳せ」る歌の一つが、和歌「奥山に」だという。ここに遠回しに表現された意味を考えてみたが、次の中にまちがっているものが一つある。それを選び、記号で答えなさい。

- ア この和歌「奥山に」は、都の中で想像によって作られたものではなく、実景を詠んだものだろうと思われる。
- イ 平安時代の生活は現代の生活より未発達であることは間違いないが、それでも山里とは暮らしぶりが違った。
- ウすでに都人となった人たちは、和歌「奥山に」に詠まれた実景を理解するにはあまりに都暮らしになじみすぎていた。
- エ 都人の生活に時代なりの進化があったと思われるが、それでもわびしい山里暮らしを回想しとり戻したいという欲求はあるものだ。

オ 都にはすでに秋に鳴く鹿を間近に見るような生活はなく、それだからこそ鹿の声に人の情感がかき立てられる和歌に価値を見出している。

問七 ――部④では、和歌「奥山に」を取り上げ、古今集の性格に言い及んでいる。その説明として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 「古」と「今」らしさを区別するのは難しく、「歌合せ」などの資料を熟読しない限りはわかってもらえないものではない。
- イ 昔の和歌を投げ出してしまふことなく作品に収めることで当時の「今」に続く和歌の伝統を守ろうとしている。
- ウ 当時として何とか理解できた「昔」の和歌が、我々の目からは見分けにくいのが、よく読めば「古」「今」をうまく編んで作られている。
- エ 和歌の中には、古今集の時代においても古風な和歌が入れ込まれており、古今集がなぞに満ちた作品となっている。

問八 この文章で伝えていることをまとめたが、まちがっているものが一つある。それを選び、記号で答えなさい。

- ア 花札かるたで知られる紅葉の下で鳴く鹿の絵柄は、古今集の撰者たちならばあのようなものにはならなかった。
- イ 古今集撰者の解釈を理解していたであろう藤原定家は、おそらく別の根拠によって赤く染まる紅葉の下で鹿が鳴いていると考えた。
- ウ 万葉集においては鹿は、萩とともに詠まれていたことがわかるが、都人にはそれが次第にわからなくなっていた。
- エ かつて秋の鹿がどのような風物と似つかわしいかはよく知られたが、それも平安京に遷るまでのこととなってしまったのは残念なことだ。
- オ 和歌には実感が大切だったが、歌合せが歌人の実感を失わせる方向に向かわせたし、やがて作品の作者さえも忘れ去られていった。

Ⅲ 次のそれぞれの四字熟語の空欄に入る漢字を答えなさい。

- A 支離（ ） 裂
- B （ ） 戦苦闘
- C 一世（ ） 靡
- D 臨機（ ） 変
- E （ ） 途有望
- F 単（ ） 直入

国語解答

小計43点

二 問一 2点×6

a	興味	b	展開	c	商談	d	延長
e	かいひ	f	だいさんじ				

二 問二 2点×5

1	ア	2	イ	3	エ	4	ウ	5	オ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

二 問三 2点×3

A	イ	B	ア	C	エ
---	---	---	---	---	---

二 問四 2点

副詞

五 問五 2点

りません。

二 問六 2点

③

七 問七 3点

中立的、客観的な意味

八 問八 3点

エ

九 問九 3点

オ

小計33点

三 問一 2点×3

新古今集	③	ウ	古今集	②	イ	万葉集	①	ア
------	---	---	-----	---	---	-----	---	---

二 問二 3点×3

A	ウ	B	エ	C	オ
---	---	---	---	---	---

二 問三 3点×3

ウ

四 問四

オ

五 問五

エ

六 問六 3点×3

エ

七 問七

ウ

八 問八

オ

小計12点

三 問一 2点×6

A	滅	B	悪	C	風	D	応	E	前	F	刀
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

小計12点

四 問一 2点×6

①	ア	②	エ	③	カ	④	イ	⑤	カ	⑥	エ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- ア 名詞
- イ 動詞
- ウ 形容詞
- エ 形容動詞
- オ 連体詞
- カ 副詞
- キ 助詞
- ク 助動詞

(夏目漱石『門』冒頭部)

宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して、日当りの好きそうな所へ気楽に胡坐をかいて見たが、やがて手に持っている雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。秋日和と名のつくほどの上天気なので、往來を行く人の下駄の響が、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。

四 次の部①～⑥の品詞を後から選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度使っても良い)